

二〇二二年度 入学試験問題

国 語

第一回

【注 意】

- ・ 試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
- ・ 問題は一ページから七ページまでです。
- ・ 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- ・ 字数制限のない問題について、一行分の解答らんに二行以上解答してはいけません。
- ・ 記号・句読点がある場合は字数に含みます。
- ・ 解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

1 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

AIと共存していく社会について、考えてみましょう。AIは何らかの答えを出してくれますが、問題はその答えが正しいかどうかのケンシヨウをヒトがするのが難しいということです。大切なことは、何をAIに頼って、何をヒトが決めるのかを、しっかりと区別することでしょう。

よく使われるものとして、データをコンピュータに学習させて、それを基に分析を行う機械学習型のAIがあります。これは過去の事例からの条件(重み付け)にあった最適な答えを導き出すので、その学習データの質で答えが変わってきます。画像診断AIのように、見落としがないかなど医師の診断を助ける道具としては非常に役に立ちます。ただ、例えば過去の事例にないケースの判断は難しいのですが、その場合には「正解を知っている」医師が判断すればいいので問題はありません。

(1) 機械学習型ではなく、SF映画に登場するヒトのように考える汎用型人工知能はどうでしょうか？ まだ開発途中ですが、さまざまなキョクメンでヒトの強力な相談相手になることが期待されています。こちらはヒトが「正解を知っている」わけではないので、使い方を間違えとかなり危険だと思っています。なぜなら、ヒトが人である理由、つまり「考える」ということが激減する可能性があるからです。一度考えることをやめた人類は、それこそAIに頼り続け、「主体の逆転」が起こってしまうと思います。ヒトのために作ったはずのAIに、ヒトが従属してしまうのです。

ではそうならないようにするには、どうすればいいのでしょうか。私の意見としては、決して「ヒトの手助け」以上にAIを頼ってはいけないと思います。A AIはツール(道具)で、それを使う主体はリアルなヒトであるべきです。

「いや、AIのほうが賢明な判断をしてくれるよ」とおっしゃる方もおられるでしょう。しかし、それは時と場合によります。いつも正しい答えが得られるという状況は、ヒトの考える能力を低下させます。ヒトは試行錯誤、つまり間違えることから学ぶことを成長と捉え、それを「楽しんで」きたのです。喜劇のコントの基本は間違えて笑いを誘い、最後はその間違いに気づくことが面白いのです。逆に「悲劇」は、取り返しがつかない運命に永遠に縛られることに、恐怖と悲しみを覚えるのではないのでしょうか。AIは、人を楽しませる面白い「ゲーム」を提供するかもしれません。

B、リアルな世界では、AIはヒトを悲劇の方向に導く可能性があります。そして、何よりも私が問題だと考えるのは、AIは死なないということです。

私たちは、たくさん勉強しても、死んでゼロになります。そのため、文化や文明の継承、つまり教育に時間をかけ、次世代を育てます。一世代ごとにリセットされるわけです。死なないAIにはそれもなく、無限にバージョンアップを繰り返します。

私は1963年の生まれで、大学生の時(1984年)にアップル社からマッキントッシュ(Mac)のコンピュータが発売され、その後ウィンドウズが誕生したのを体験してきました。ゲームも、フロッピーディスクに入った「テトリス」を8インチの白黒画面でハイスコアを競ったものです。その後のパソコン、ゲーム機、スマホなどの急速な進歩は、本当に驚きです。

私はコンピュータの急成長も可能性も脆弱性も知っている「生みの親」世代です。そしてコンピュータが「生みの親」より賢くなっていくのを体感してきました。だからこそAIの危険性、つまりこのままいったらやばい、と直感的に心配になるのかもしれないかもしれません。いつまで経っても子供が心配な親の心境に似ています。

その危機感について、自分の子供に相当する世代には警鐘を鳴らすことができますが、孫の世代にはどうでしょうか。孫たちにとってはヒト(特に親)の能力をはるかに凌駕したコンピュータが生まれながらにして存在するのです。タブレットで読み・書き・計算を教わり、シジョウウが入らないようにと先生代わりのAIが成績をつけるという時代にならないとも限りません。そんな孫の世代にとっては、AIの危険性よりも信頼感のほうが大きくなるのは当然です。

死なないAIは、私たち人間と違って世代を超えて、進歩していきます。一方、限られた私たちの寿命と能力では、もはや複雑すぎるAIの仕組みを理解することも難しくなるかもしれませんね。人類は1つの能力が変化するのに最低でも何万年もかかります。その人類が自分たちでコントロールすることができないものを、作り出してしまったのでしょうか。

進歩したAIは、もはや機械ではありません。ヒトが人格を与えた「エイリアン」のようなものです。しかも死にません。どんどん私たちが理解できない存在になっていく可能性があります。

死なない人格と共存することは難しいです。C、身近に死なないヒトがいたら、と想像してみてください。その人とは、価値観も人生の悲哀も共有できないと思います。非常に進歩したAIとはそのような存在になるのかもしれませんが。

多くの知識を溜め込み、いつも合理的な答えを出してくれるAIに対して、人間が従属的な関係になってしまふ可能性があります。私たちがちょうど自分たちより寿命の短い昆虫などの生き物に抱くような、ある種の「優越感」と逆の感情を持つのもかもしれません。「AIは偉大だな」というような。

ヒトには寿命があり、いずれ死にます。そして、世代を経てゆつくりと変化していく——それをいつも主体的に繰り返してきましたし、これからもそうあることで、存在し続けていけるのです。AIが、逆に人という存在を見つめ直すいい機会を与えてくれるかもしれません。生き物は全て(4) Xな命を持っているからこそ、「生きる価値」を共有することができ

るのです。同様にヒトに影響力があり、且つ存在し続けるものに、宗教があります。もともとその宗教を始めた開祖は死んでしまっても、その教えは生き続ける場合があります。そういう意味では死にません。

ヒトは病氣もしますし、歳を重ねると、ロウカもします。ときには気弱になることもあります。そのようなときに死なない、D多くの人が信じている絶対的なものに頼ろうとするのは、ある意味理解できることです。AIも将来、宗教と同じようにヒトに大きな影響を与える存在になるのかもしれませんが。

宗教は、付き合い方を間違えると、戦争やテロにつながるのは歴史からご存じの通りです。ただ、宗教のいいところは、個人が自らの価値観で評価できることです。それを信じるかどうかの判断は、自分で決められます。それに対してAIは、ある意味ヒトよりも合理的な答えを出すようにプログラムされています。ただ、その結論に至ったカテゴリーを理解することができないので、人がAIの答えを評価することが難しいのです。「AIが言っているのでそうしましょう」となってしまいかねません。何も考えずに、ただ服従してしまうかもしれないのです。

それではヒトがAIに頼りすぎずに、人らしく試行錯誤を繰り返して楽しく生きていくにはどうすればいいのでしょうか？

その答えは、私たち自身にあると思います。つまり私たち「人」とはどのような存在なのか、ヒトが人である理由をしっかりと理解することが、その解決策になるでしょう。

人を本当の意味で理解したヒトが作ったAIは、人のためになる、共存可能なAIになるのかもしれませんが。そして本当に優れたAIは、私たちよりもヒトを理解できるかもしれません。さて、そのときに、その本当に優れたAIは一体どのような答えを出すのでしょうか？——もしかしたらAIは自分で自分を殺す（破壊する）かもしれませんね、人の存在を守るために。

（小林武彦『生物はなぜ死ぬのか』）

★フロッピーディスク……コンピュータ用の記録装置。

★脆弱性……もろくて弱性質。

★凌駕……あるものをこえてそれ以上になること。

★エイリアン……ここではSFに出てくる地球外の生命体。

問一

——(1)「機械学習型ではなく、SF映画に登場するヒトのように考える汎用型人工知能はどうでしょうか？」とありますが、「機械学習型のAI」と「汎用型人工知能」の違いは何だと述べられていますか。解答らんに三行以内で説明しなさい。

問二

——(2)「何よりも私が問題だと考えるのは、AIは死なないということとです。」とありますが、AIが死なないことは問題だと筆者が考えているのはなぜですか。解答らんに七十字以内で説明しなさい。

問三

——(3)「AIの危険性よりも信頼感のほうが大きくなるのは当然です。」とありますが、その理由を筆者はどのように考えていますか。理由としてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「生みの親」世代が自分の子供にあたる世代に伝えたAIの危険性を、子供の世代がさらにその子供である孫の世代に対して緊迫感をもって伝えることができていないため、孫の世代が危険性を理解していないから。

イ いまのコンピュータやAIは「生みの親」世代がかつて誕生を体験したコンピュータよりもはるかに発展した技術であり、その恩恵を受けている「生みの親」世代にもかかわらずのような危険性が感じられにくくなり孫の世代に伝えなくなったから。

ウ 筆者の世代はコンピュータなどの技術が誕生したのを目の当たりしているためコンピュータをまるで子供のように思いよく理解している一方で、孫の世代はコンピュータをよく理解しないままでもまるで親を信頼するように信頼してしまうから。

エ 生まれながらに高性能のコンピュータがある孫の世代は、コンピュータがヒトより賢くなつていく段階を体感していないためAIの危険性を感じていないうえに、AIがヒトの能力を超えていることしか知らないから。

問四

——(4)「X」な命を持っている」とありますが、この部分では命に關して生き物がAIと対照的であることを述べています。Xに入るのにふさわしい漢字二字の言葉を考えて答えなさい。

問五 ——(5)「もしかしたらAIは自分で自分を殺す(破壊する)かもしれないね、人の存在を守るために。」とありますが、人の存在を守るためにAIが自分で自分を殺すとはどういうことですか。解答らんに三行以内で説明しなさい。

問六

A D に当てはまる語を次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

ア しかし イ しかも ウ あくまで エ 例えば

問七

——(ア)～(オ)のカタカナを漢字に書き直しなさい。

問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア AIの普及に伴いAIが間違った使い方をされることも多くなるため、AIは自ら考えるために作られたものであるのに、AI自身で考えられなくなる「主体の逆転」が起こる。

イ ヒトは何かを間違えても、その間違いに気づいて学ぶことを楽しみとしてきたので、AIによって正しい答えを得ることが常によいとは言えない。

ウ 現在のAIが搭載されたタブレットを孫世代と考えた時に、筆者が大学生の時に発売されたマッキントッシュやウィンドウズは二世代前の技術であるため、筆者は自分のことを「生みの親世代」と呼んでいる。

エ 宗教はAIと同様にヒトに大きな影響を及ぼすもので、しかも一度入信すると自らの意思よりもその宗教の考え方に左右されてしまい、場合によっては戦争やテロを引き起こすものである。

2 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

葉子としおりは、小学校ではクラスの「日陰」にいる者同士、親友だった。しかし、葉子は成長とともにあか抜けて、中学校では「日向」にいる朱里と仲良くなり、しおりとは疎遠になっていった。中学二年で同じクラスになった葉子としおりは、朱里とともに体育祭の応援旗に絵を描く係になる。

本当は、私だって分かってはいた。

髪型を変えたって、メガネを外したって、私は「日陰」のほうが心地いいんだって。

きゃあきゃあと騒いでいるより、

恋バナややりのファッションの話より、絵を見たり、描いたりしていたい。

朱里たちのことは、ちゃんと好きだ。一緒にいるのだから楽しいし、自信のあるところにあこがれもする。だけど、いつだって私は、朱里たちにも透明な壁を感じてる。そしてそれは、朱里たちのせいじゃなくて、きっと、私自身の問題だ。

気がつくのと、いつの間にか教室の前に着いていた。そういえばカギ、開いてないかもしれないな、と今さらのように気づいた時、中で人影が動く気配がした。

——あれ？ だれかいる？

たしか、うちの学校には、朝練のある部活はなかったはずだ。なのにこんなに早く登校している人がいるなんて。驚きながらも、そのまま、ドアをガラリと開けた。その瞬間。

「えっ」

思わず、すつとんきような声が出た。人影が弾かれたようにふり返って、私を見る。束ねた黒髪。長いスカート。驚いたように見開かれる、おだやかなたれ目——。

「……葉子」

ささやくような小さな声で、しおりは、私の名前を呼んだ。

数学の宿題学校に忘れちゃって、と私が言うのと、「そうなんだ」としおり

は、目をふせたままで言った。そのまま、どちらからともなくだまり込んでしまう。しおりの緊張が、空気を通して

「なんか、暑いね」

つぶやいて、しおりが窓のほうへ歩いていく。窓を開けると、すつと空気が入れ替わって、ゆつくりと顔のほてりが引いていった。だれもない教室。その中で、しおりとふたりでこうして言葉を交わしているのが、なんだか、信じられなかった。

「……しおりは？ なんて、こんな朝早くに」

おずおずと尋ねると、しおりは、窓の外から私のほうに視線を戻した。

「放課後、応援旗あるから。部活の時間、減っちゃうな、って。だけど、県展にどうしても間に合わせたい作品があったから——」

★ザワ先には、美術部が朝練なんてってびっくりされちゃったけど。そう言っ、しおりはかすかに笑う。その答えに、胸をつかれた。と同時に、心がぎゅつと苦しくなった。

——差がつくのなんて、当然だった。だって私は一度だって、しおりほど真剣に、絵に向き合ってきたことがなかった。

「すごいね、しおりは。毎日、頑張って描いてて。私なんか——」

卑屈な言葉がこぼれかけて、はっとする。こんなことを言われても、しおりは困るだけだ。顔を赤くして思わずうつむくと、しおりがかすかに、身じろぎをする気配がした。

「葉子は、嫌いになったの？」

「え」

どきりとして私が顔を上げたのと、「絵、描くの」と、しおりがつづけたのは、ほとんど同時だった。その問いかけに、私はふたたび、下を向く。

「嫌いになったんじゃないよ。でも……」

怖くなった、なんて言っても、しおりはきよんとするだろう。そう思ったら、言葉がそれ以上つづかなかった。かわりに、しおりに問いかける。

「しおりは迷ったりしなかった？ 美術部に入ること。その……美術部って、なんか雰囲気独特だしさ、運動部に入りたがる子のほうが多い……じゃん」

風が吹く。カーテンの影が揺れて、床に落ちた朝陽をさえぎる。バカなことを聞いた、と思った。だって、迷うわけない。しおりは、こんなにも

真剣なんだから。

けれど、返ってきたのは、意外な一言だった。

「……少しだけ」

え、と私は目を見開く。しおりは目を細めて、小さく、ほほえんだ。

「でも、やっぱり、好きだから。それ以外、ないなって」

その瞬間、私はふいに、泣いてしまいたくなった。

だってしおりは、怖くても、好きなものには手を伸ばせるのだ。だけど

しおりは、「日向」に飛び込んでいった私には、手を伸ばそうとしなかった。

すれちがうたびに目をそらしつつつけてきたのは、私ひとりだけじゃない。

しおりだって、同じだった。

(2) もう、戻れないのかもしれない。こんなに強くそう実感したのは、これ

が、初めてだった。離れてしまったことを、こんなに後悔したことも。

「じゃあ、私、そろそろ美術室、行くね」

しおりが言って、私にふっと背を向ける。その瞬間、心の中で、声が出た。

——だけど、本当にこのままでいいの？ 私自身は。

「しおり！」

叫ぶように呼びかけると、ドアに手を伸ばしかけていたしおりが、驚いた

ようにこちらをふり向いた。その目をまっすぐに見返して、私は迷いながらも口を開く。

「また——また、後で。教室でね」

そう言うのと、しおりは何度かまばたきをして、それからゆっくりとうな

ずいた。いつかの、⁽³⁾つぼみがほころぶような笑顔で。そして、言った。

「……うん。また、放課後に」

その日の放課後、私は、朱里の前で、初めてしおりの名前を呼んだ。

「しおり、背景の色ってこんな感じの青でいいかな」

そんなふうには、しおりに話しかけた私に、あんのじょう、朱里は **C**

したような目を向けた。なんで？ 葉っぱ、何言っちゃってんの——？

あからさまに向けられた困惑と非難のまなざしがぴりぴりと肌突き刺

さって、息が止まりそうだった。

怖くない、なんて言ったら、百パーセント、嘘になる。本音を言うと、

今すぐにも逃げ出したかった。

——だけでも、怖がるのはやめる。やめるって、決めただ。

ぐらつく心をびしっと叱って、私は、うつむきそうになるのをぐっとこ

らえる。

耳をすませるまでもなく、心臓がばくばく波打っているのが分かった。

パレットの中でつやめく空の色を見つめながら、ただ、祈るように、息を

つめて待つ。

(4) 凍りついたような沈黙。

それを、先に破ったのは、朱里ではなくて、しおりのほうだった。

「……うん。それで大丈夫。ありがと、葉子」

ささやくような、まだかすかにためらいのにじんだ声。

けれどしおりは、間違はなく、私の名前を呼び返してくれた。

顔を上げると、しおりと宙で視線が合った。だけでもう、その目を私は

そらさない。「了解」と笑顔で言って、私は、刷毛をたつぷりの青にひたし

ただどもちろん、このままで、今日が終わるはずはなかった。

「あのさ、葉。なんなの、さっきのアレ」

葉、ちよつとトイレ行かない？ と、声をかけられた時から、何か言わ

れるだろうな、とは思っていた。だから覚悟はしていたはずだったのだけ

ど、やっぱり、面と向かって直球を投げられると、足がすくんだ。

「なんで瀬川さんのこと、急に呼び捨てにしてんの？」

びっくりなんだけど、と朱里はひとりごとみたいにつぶやいて、ロコッ

(5) に不審そうな顔をこちらに向ける。私は小さく息を吸って、意を決して口

を開いた。

「……友達、なんだ。小学校からの」

そう言って、必死でなんでもない顔をして、朱里の顔をまっすぐに見る。

(6) 顔が熱い。なのに、どうしようもなく足元は寒かった。もうじき四月も終

わるといふのに、身体に細かい震えが走る。

「友達って……」

朱里はあきれたような声でそうつぶやくと、**D** だまった。眉を寄せ、

何かを考えているような表情。だけどややあって、朱里は気を取り直した

ような、わずかに明るい声で「まあでも、それって、昔の話なんでしょ？」

と言った。

——え。

どうして、そういう話になるんだろう。きよとんと私がまばたきをする
と、「え、だってそうじゃないの？」と、朱里が首をかしげた。

「だって、これまで瀬川さんと葉がクラスの中でしゃべってるとこ、見た
ことなかったし。今も仲いいんだったら、もつと前からしゃべってるはず
じゃん」

朱里の指摘に、言葉につまる。たしかに、一理あったから。思わず口こ
もった私にちらりと目をやって、朱里は「だったらさあ」と苦笑まじりに
つづけた。

「今さら、義理立てしてあげなくたって、大丈夫だって！ 瀬川さんって
いかにもマイペースって感じだし、うちらと全然ジャンルちがうじゃん。
そこまで葉が、気をつかってあげること、ないと思うけど」

——ちがう。義理立てとか、そんなんじゃない。

「そうじゃないの。私が今、しおりと、友達になりたくて」

気がつくと、とっさに、そう口走っていた。でもそれは、とっさだった
からこそ、本音でもあった。冷たい汗が背中を伝う。どうしよう。朱里
の顔が、見られない。

「……へー、そうなんだ」

ひりつく沈黙の後、朱里は感情の読めない平べったい声でつぶやいて、
短く笑った。

「なんかさ、前から思ってたけど、葉ってほんと、やさしいんだね。だれ
にでも」

あ、と思つて目を上げた時には、朱里はもう、きびすを返したところだっ
た。そのまま、私を置いて、怒ったような足取りでトイレから出ていっ
てしまう。

しばらくして、私がひとり教室に戻ると、そこに朱里の姿はなかった。
呆然と立ち尽くす私を見つけて、しおりが「葉子」と遠慮がちに口を開く。
その隣で百井くと松村さんが、眉をハの字に下げていた。

(水野瑠見『十四歳日和』)

★サワ先……小沢先生。葉子たちのクラス担任。

125

130

135

140

145

150

問一

——(1)「怖くなった」とありますが、絵を描くのが怖くなった理由と
してふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えな
さい。

ア 疎遠になってしまったしおりと同じ趣味を持つていることをしお
りはよく思わず、ますます自分が嫌われることになるから。

イ 絵を描くことを熱心にやらなくなったせいで、絵の上手いしおり
にとうてい追いつけないと実感せざるを得なくなるから。

ウ 学校内であまり目立つことのない美術部に、「日向」に飛び込んだ
自分が入るのはあまりにも場違いだから。

エ 「日向」のグループにいる友人とは違う趣味を持つていることを知
られたら、仲間外れにされてしまうかもしれないから。

問二

——(2)「もう、戻れないのかもしれない。こんなに強くそう実感した
のは、これが、初めてだった。」とありますが、葉子がそう思ったのは
なぜですか。その理由を解答らんに三行以内で説明しなさい。

問三

——(3)「つぼみがほころぶ」とありますが、植物に関することばを使っ
た次の一～五の成句の意味を、後の「意味」ア～オの中から一つずつ
選び、記号で答えなさい。

一 草の根を分けて探す 二 出藍の誉れ 三 根掘り葉掘り
四 花を持たせる 五 柳に雪折れなし

「意味」

ア 教えを受けた弟子が、その先生よりも優れている。

イ やわらかいものは、弱そうに見えても、かたくて強そうに見える
ものよりかえってたえる力がある。

ウ あらゆる方法を使って、すみずみまで探す。

エ 何から何まで、細かいことをしつこく尋ねる。

オ 手柄や名誉をゆずったりして、相手を立てる。

問四

——(4)「凍りついたような沈黙。」とありますが、このときの葉子の気
持ちを解答らんに五十字以内で説明しなさい。

問五

——(5)「不審ふしんそうな顔をこちらに向ける。」とありますが、朱里はなぜこのような態度をとったのですか。解答らんに行三行以内で説明しなさい。

問六

——(6)「顔が熱い。なのに、どうしようもなく足元は寒かった。」とありますが、このときの葉子の気持ちとしてふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 朱里に対して本心をつらぬく決心をしたものの、仲間と見なされなくなることをおそれる気持ち。

イ 勇気を出して本心を打ち明けたが、朱里に受け入れられる見込みこがなく後悔こうかいする気持ち。

ウ ようやく自分に素直すなおになれたことに興奮しているが、それを朱里に悟さとらせまいと焦あせる気持ち。

エ 朱里に自分の本心を伝えたことで達成感を得ながらも、朱里ともう仲良くできないという喪失感そうしつにおそわれる気持ち。

問七

A ～ D に当てはまる語を次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

ア ひりひりと イ ぎよつと ウ ひっそりと エ ぶつりと

問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア しおりは、数学の宿題を忘れてしまったことをきっかけに葉子とふたりきりで話し、これからは逃げにげずに尊敬できる友達いっしょと一緒にしようと決意した。

イ 葉子は、朱里とは気が合わず好きになれないため少しずつ距離きょりを置きたいと思っており、しおりと仲がいいことを非難びなんされても仕方ないと思っている。

ウ しおりは、中学校入学以降葉子に近づかなくなっていたが、葉子が歩み寄よってくれたことをとまどいながらも嬉うれしく思っている。

エ 朱里は、しおりに対して劣等感れつとうを抱いだいており、しおりを呼び捨てにして仲良くしている葉子の素直さをうらやましく思っている。

